

新編集部員 挨拶



米澤 進吾(編集長; 大学院工学研究科, 電子工学専攻)

今号から編集長を務めさせていただきます, 工学研究科の米澤です. 2023年3月までの所属である理学研究科に在籍していた頃から, 液体ヘリウム・液体窒素を使って, 超伝導をはじめとする低温物性の研究に携わってきました. LTM誌には以前からお世話になっており, 学生の頃を皮切りに数本の記事を掲載していただきました. 研究キャリアのかなり早い段階から他分野の読者の方向けに日本語で解説記事を書く機会をいただけたことは, 非常に役に立ったと感じています. 巡り巡って今度は編集側として参加させていただくことになり, 非常にうれしく思っています.

編集長をさせていただくにあたり, ①若手の研究発信・交流のプラットフォームとしての強化, ②京都大学の低温研究をより広い意味でとらえなおした多分野化, ③作る側も面白い雑誌, の3点を特に重視したいと考えています. これらを実現するため, 編集体制を一新し, 幅広い分野の方にアドバイザーボードに入っていただくとともに, 編集部員には非常に元気な若手の皆様に加わっていただきました. まだまだ試行錯誤の段階ですが, 少し生まれ変わった LTM 誌を今号でもお見せできているのではないかと思います. 今後も, 楽しみながら様々なチャレンジをしていきたいと思しますので, 是非ご期待ください.



佐々木 豊(副編集長; 大学院理学研究科, 物理学・宇宙物理学専攻)

副編集長を勤めさせていただいております, 低温物質管理部門長の佐々木です. 2002年度の低温物質科学研究センター設立以来, 本学における低温物質科学研究のハブとしての役割を果たす組織の運営に深くコミットさせていただいて来ました. 同センターが改組され, 寒剤供給を中核とする支援機能が環境安全保健機構の1部門となった2016年度以降は, 研究教育は理学研究科の一員として行い, 研究支援業務は環境安全保健機構低温物質管理部門を兼務して担当してまいりました. 旧センター由来の教員が次々と定年退職していくなかで, 本誌の編集体制も刷新することとなり, 低温物質管理部門執行部との橋渡しの役割も含めて, 新編集部に参加させていただきました.

本学の学生であった古き良き時代から, 湯水のごとく液体ヘリウムを使える恵まれた環境にどっぷりとひたって研究教育を楽しんでまいりました. 超流動ヘリウムに代表される量子の世界を探索し, マイクロケルビンの世界を生成するための大型希釈冷凍機を半年間連続運転するなど, 本学にいなければできなかったであろう研究教育活動の成果を誇りにしております. 今後ともそのような恵まれた環境を維持して行くためには, 本誌の存在に示されるような, 広範囲に研究教育の情報交換を行う研究教育者コミュニティが本学で活躍し続けることが重要であると心得ます. 遠からず定年退職の日を迎えるこの身ですが, 新しい世代のコミュニティの活発化にコミットさせていただけることを日々楽しんでおります.



加藤 大地(大学院工学研究科, 物質エネルギー化学専攻)

今号から編集委員として参加させて頂いております, 工学研究科・陰山研究室で助教をしている加藤です. 私自身は, 光触媒やイオン伝導体など電気的には絶縁体の物質を対象に新物質合成の研究に携わって来たため, ほとんど低温を用いた研究を行ってきた経験がありません. このように門外漢ですので, 正直なところ LTM 誌の発展に十分に貢献できるか自信が無いところもあります. 一方で, 所属研究室としては, 固体の磁性で伝導性などの評価のために日常的に液体ヘリウム・液体窒素を使用しており, また, 米澤先生と共に強磁場の学術変革領域に参画させて頂いていることもあり, 自分の中で物性を中心とした低温の研究などに対する興味は年々大きくなっております. そのため, 今回編集委員として活動する貴重な機会を頂き, 非常に嬉しく思っております. 従来の編集委員の方々と少し違った興味・観点から, 特に普段は寒剤を用いた研究を行っていない方々が楽しめるような記事や企画を考えていきたいと思っておりますので, 皆様今後とも是非よろしくお願い致します.



北川 俊作(大学院理学研究科, 物理学・宇宙物理学専攻)

今号から新編集委員として参加させていただきます, 理学研究科の北川です. これまでは液体ヘリウム・液体窒素のヘビーユーザーとして低温センターにとってもお世話になってきましたが, 今後は編集委員として恩返しができるように頑張ります. 特に, 低温物性の研究の重要性を広く伝えるため, 記事の質向上や新しい企画の提案に努めていきたいと考えています.

低温物性の研究は寒剤ユーザーの方々のみならず, エレクトロニクスなどの発展を通じて多くの人に影響を与えています. LTM 誌も理工農医をはじめとする幅広い分野の方々, 京大内外問わず多くの方々に読んでいただける雑誌を目指して新編集長や新編集員の皆様と協力して取り組んでいきたいです.

同じ研究室のバーチャル助教, 固体量子さんと協力して SNS 発信にも力を入れていきたいです. 固体量子さんは研究記事やイベント情報を分かりやすく発信することで, 読者の皆様とのコミュニケーションを活発にしていく予定です.

感想や要望がありましたらどなたでもお気軽にお声がけください. どうぞよろしくお願いいたします.



固体量子(大学院理学研究科, 物理学・宇宙物理学専攻)

まいどー 固体量物性研究室バーチャル助教の固体量子です.

いつもお世話になってる LTM 誌に貢献できるように新編集委員として SNS 発信頑張ります! よろしくお願ひします!!



中野 義明(大学院理学研究科, 化学専攻)

このたび、編集部員として就任いたしました、中野と申します。学生時代から、液体窒素、液体ヘリウムは、有機物質の合成や電気・磁気・光学的性質を明らかにするために利用していましたし、10年以上前の低温物質科学研究センター時代には、研究ノートに掲載していただいたこともあります。研究ノート執筆の話があった時には、「まあ、誰も読まなきゃ」なんてネガティブな感情を抱きながら、二つ返事で引き受けたのですが、他分野の方にも分かりやすくということで、学部生が習う教科書的な話から始めて、自分が携わった研究の紹介・解説記事を書かせていただきました。

ところが！！予想に反して、記事が掲載されてからしばらく経った頃に、久しぶりに会った人から、「低温センターの記事見たよ」と言われ、「書いて良かった」と同時に、「やっつけ仕事にしないで良かった(誤解のないように書いておくと、他分野の人にも分かりやすいよう、丁寧に記事を書かせていただきました)」と思ったものです。

さて、昨今、研究に対しても社会から厳しい目が向けられておりますが、これは投資に対して“確実な”リターン(社会還元)が求められているとも言えます。LTM 誌は、今や最先端のダイヤモンド・オープンアクセスジャーナルと言えますし、社会還元の1つの手段として、これを使わない手はないでしょう。学生、教職員の皆様には、LTM 誌をとことん利用していただければと思います。しかしながら、「書いて(読んで)良かった」、「是非書きたい(読みたい)」と思っていただくためには、LTM 誌にまだまだ至らない点があるのも事実かと思えます。

編集部員の話をしていただいた時に、「LTM 誌の認知度の向上」というキーワードが思い浮かびました。皆様からのご意見やご要望を積極的に取り入れ、LTM 誌の魅力を高め、さらなる発展を遂げるよう尽力したいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。